

「一 日間フリーになったんだけど、どこかに行きませんか。」

そう書いてよこしたのは、大阪在住のS氏である。海陸ともにガソリンを使わない移動については、知識技量それに経験を積んだ先達である。誘いには乗ってみよ、というのが氏の信条で、話を聞いていると、自分を値踏みしている暇があれば、言われるままにやってみたらよろし、という気になってくる。ぼくのランニングも自転車も氏の勧めに従ったもので、何年も続いた上に、効果も感じているのだから、氏の言うとおりである。

氏のやり方はちつとも勧誘つぽくない淡々としたもので、効能と具体的な手順を説明し、まあ気が向いたらどうぞ、という感じである。向いているとかいないとか余計なこととは言わない。助言に熱量はいらず、タイミングが全てだから、ありがたい。

今回はサイクリングの誘いで、何となくグズグズしている自分を目覚めさせるに十分なものだった。候補地プランはいくつもあつたが、

「いつそのことこちらに来ませんか。」

この提案に、まずは先達のホームグラウンドで学べし、という気になり、一も二もなく同意した。やりとりをしたその週の内に出かけるという急な話だったの

で、すぐさま準備に取りかかった。自転車を点検に出す、図書館で行き先の下調べをする、持ち物をそろえる、コロナで長いこと遠ざかっていた旅行前のジタバタと興奮が蘇ってきた。

「ちょっと遠出するもんで。」

自転車を点検に出す際、別に言わなくてもいいことを言つてにやついた。

「へえ、どちらまで。」

心得たもので、若い店員が刺激している。

「いやなに、関西の方にね。」

「いいですねえ。で、距離はどのくらい？」

ん、知らんぞ。S氏のペースで設定されたら、自分には未経験の距離を走ることになるかもしれぬ。不安がよぎる。店員には適当な返答をしたが、尻の痛みを軽減するインナーを求めることにする。

「ペダル、交換されたらどうですか。ちよつといいグレードにすると滑らかさが全然違いますよ。」

「じゃ、それも。」

いいカモである。

かくして、点検や交換のなつた自転車を車に積み。車輪の外し方を習得しなければ、と思つていたが、意外にもそのまま乗ることがわかつた。こんなことでも意欲いや増す。



専業ババ奮闘記 (その2) 74

木幡智恵美

義母の異変 (6)

八月も終盤だというのに、三十六度を超える日が六日も続いた。三十七度を超える日もあり、いい加減にしてくれという思いだ。義母が家にいると、ドンドンドンと度々お呼びがかかる。「暑いけん」「開けてください」「トイレ」「寒いです」「熱がある」その度に部屋に行くので、点訳ははかどらない。けれども、暑さを忘れさせてくれる。

九月に入り、三度目の泌尿器科受診をした。抗生物質をずっと続けるわけにはいかないので、漢方薬に変えましょうと、二週間分渡された。帰つてから、「暑い」「寒い」「トイレ」「暑い」「寒い」と短い時は五分も経たずに呼ばれる。呼んだことを忘れるのだろうか。その前の日から左脚の動きが悪く、トイレに連れて行くこと自体が大仕事だ。椅子から立ち上がることも、車椅子に移動するのもなかなかで、補助しようと腕や脚に手を掛けると痛がる。自力での移動を見守っていると、何十分もかかる。そのうち、「あ、出た」となつてしまふ。

その日は娘が歯科に行く間、宗矢を預かることになつていたので、訳を話し、娘にトイレ介助を實際にやってみせてもらった。義母を部屋に送つた後、「まだ介護認定申請してないの。二なんかじゃないよ、絶対四はいつてるよ」と娘は言つて、歯科へ向かつた。

宗矢は私を見ると、両腕を伸ばし、抱っこをせがむ。抱いて歌を歌つてやると、腕の中で眠つた。寛大も実歩もこうして寝かせたものだ。この寝顔を見ていると、けいれんを起こすほど大泣きする姿を見たことがないので、どんな風になるのか想像がつかない。宗矢が眠っている間、寛大や実歩が来るまでにと夕食の下ごしらえをしていると、ドンドンドン。娘がしていた通りに補助しようとするが、うまくいかない。自力で車椅子まで移動するのを待ち、何とかトイレまで連れては来たが、車椅子から便座までの移動ができない。一步がこんなに遠いとは。宗矢が起きやすいか気がでない。トイレで立ち往生したままの義母に言つた。「もうパンツの中でしてください」

その夜は、娘と三人の子どもを交えた夕食で、義母はひ孫たちを眺めながら食べていた。娘たちが帰り、待てずに手を出したがる夫を制しながら、二人掛かりで何とか義母をベッドに寝かせる。部屋を後にした夫が言つた。「介護認定、申請するか。明日電話するわ」

30代フリーター やあ、ジイさん。朝日新聞の世論調査（10月19、20日）では、自民党が公約している憲法9条への自衛隊の明記に「賛成」が47%と、「反対」の32%を上回った（10月21日朝刊）。4年前の衆院選公示後の調査では賛成37%、反対40%だったのが逆転し、しかも賛成が反対を15ポイントも上回っている。この明白な変化は何に起因するのか。

年金生活者 思いあたるのはアメリカのアフガニスタン戦争での敗北だ。「撤退」という名の米軍の敗走を目の当たりにした日本国民はこの超大国の力の衰えを感じ取り、同じような戦争は二度とできないだろうと判断したに違いない。抑止力の弱まったアメリカに頼ってばかりいては、軍事的な膨張を続ける中国に対抗できない。自前の抑止力を高めるしかなく、そのためには9条で自衛隊の存在を世界にアピールすることも必要だ。国民はそう考え始めたのではないか。

～これまではアメリカの戦争に巻き込

日本国憲法はそうではない。アメリカに押しつけられたものであり、日本国民が自らの手で戦い取ったものではない。そのぶん国家権力を拘束する力は欧米先進国の憲法に比べて弱い。たとえば、生活保護は憲法25条が「健康で文化的な最低限度の生活」を国民に保障するよう国家に命じた結果つくられた制度なのに、それを受けることを当然の権利の行使ではなく、うしろめたいことのように考える偏見が根強くあることにそれはあらわれている。

30代 それでもわが憲法は曲がりなりにも国家を縛る機能を保ってきたように見える。

年金 それは9条の存在に由来するところが大きい。この条項はアメリカが日本を軍事的に無力化するために、人類の理想を利用してつくったものだ。だが、長い戦争に生命や生活を徹底的に破壊された日本国民にとっては、戦争は金輪際いやだという自らの気持ちで代弁するものだったため、二度と戦争をするなという国家に向けた命令書

まれないようにする歯止めとして9条の維持を求めてきたが、当のアメリカの弱体化でその恐れもなくなり、9条に自衛隊の3文字を書き込んでも大事には至らない、と国民は考えたと推察される。

30代 それにしても大きな変わりようだ。

年金 9条の非戦・非武装の理念は戦争そのものを忌避する戦後の日本国民のアイデンティティーの一部をなしてきた。9条の書き換えへの根強い抵抗の理由がそこにある。だが、自民党の改正案は、現行の9条1項と2項を維持したまま自衛隊を明記し、自衛権に言及するという案なので、国民のアイデンティティーをそっくり損なうものになるとは言えない。だからこそ、世論調査でも賛成が反対を上回ったのだろう。

そう考えると、安倍晋三が主導したこの改憲案は国民の意識をすくい取ったうえでの巧妙な案だということがわかる。かつて水と油をかき混ぜたよう

として機能するようになった。

国家に対する究極の縛りとも言えるこの非戦条項は、おびただしい流血によつてあがなわれたものであり、その点で西欧の市民革命と共通する一面を持つている。それがあからこそ日本国民は9条を自分たちのものと考え、そんな9条があるからこそ日本国憲法を自分たちの憲法と考えることができ

な自社さ政権をつくった自民党の老獪さがうかがえる。

集団的自衛権の行使を限定的に容認する安保法制ができた段階で、9条の新たな解釈改憲の余地はなくなり、あとは条文の直接の書き換え以外に、自衛隊に対する縛りを緩める方途はなくなった。自衛隊が明記されれば、新たな解釈改憲への道が開けることになる。

30代 自衛隊が海外に出て行って武力行使する可能性が高まるのではないか。

年金 その可能性は薄い。本質的な変化は国家権力を縛る憲法の力が9条のみならず全条項にわたって弱まることだ。

近代の憲法は、国家の権力行使を制限し、国民の権利を守る装置であり、国民が国家に宛てた命令とされる。それは西欧での市民革命を経て誕生した。言い換えれば、民衆が自らの血を代償に戦い取ったものだ。だからこそ、国家権力を縛り、国家に命令する力を持つている。

るようになった。そのことがこの憲法の他の条項にも国家を縛る力、国家に命令する力を与えてきた。

その9条に自衛隊を明記するということは、自衛隊に対するこれまでの縛りを緩めることを意味する。それはおのずと9条全体におよび、さらに9条の縛る力に支えられてきた他の条項の縛る力も低下を免れない。

30代 国家が現在よりも自在に国民を統制することができるようになる。

年金 そうとばかりは言えない。日本国民の権利意識は憲法制定当時よりはるかに強くなっているからだ。最近それが顕著にあらわれたのが、秋篠宮の長女の結婚に対する週刊誌やネットメディアによるバッシングだ。「税金で養われているのに、国民の納得しない結婚をするのか」といった非難がSNS上にあふれた。タブー視されてきた皇室批判がここまで公然と語られたことはかつてない。王室批判を大っぴらに口にする英国民に日本国民も少し近づいたと言える。

ニュース日記 806
中村 礼治

憲法9条改正に追い風か